
貧乏学園中等部

神崎颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏学園中等部

【Nコード】

N3378B

【作者名】

神崎颯

【あらすじ】

今の世は昔に比べたらよくなつてるとはいえ貧富の差が大きい。今の世の『貧』の人たちにもたとえ金はなくとも教育を受ける権利はある…ということで設立された『貧乏学園』。その学園の様子をその中等部に通う猪狩メッサとともに見守ってください。

1 限目 学校紹介（前書き）

コメントや感想は手厳しい評価、どしどしお待ちしています。

1 限目 学校紹介

青い空、白い雲。

これほどまでにいい天気、きっと神様のプレゼントだ。
金の無い僕たちを同情してくれたんだ。ありがとう神様。

あ、どうもおはよう。

聞かれてないのに自己紹介するけど、僕の名前は猪狩メツサ。日本人とフランス人のハーフだ。

ハーフというとなんか金持ちのイメージがあるけど（僕だけかもしれないが）、そんなことは全くないのだ。

なぜなら僕の家はすこぶる貧乏だ。

一般人はダンボールと呼ぶものを、僕はマイホームと呼んでいる。

河川敷で一人で暮らしている。

家族は皆とうの昔に他界してしまった。

なので、中学生の僕は働けなどせず、金など一銭もなく毎日を過ごしている。

しかし、中学生の僕は一応教育を受ける義務があるらしい。

そこで僕は『貧乏学園』に通っている。

この学校は『貧乏を極めた子供のための学校』であり、授業や給食など、すべて無料で受けられる。

その代わり、成人して働けた際には『感謝代』として金を支払う、というシステムだ。

僕はこの学校の中等部に通っている。

この学校の教育方針は『金を集めて楽しく生きよう』であり、全ての授業が金儲けへと繋がっている。そして、それぞれの授業でも目標が決められている。

例えば、数学なら『公認会計士になれ！』であり、体育なら『野球

選手、もしくはサッカー選手になれ！』であり、政治経済では『政治家になれ！』となっている。

そんな学校のは見渡す限りの変人がいる。
校長、教頭、学年主任などの先生方はもちろん、生徒までおかしいのだ。

半分くらいの生徒は眼が狂犬病にかかった犬のようだ。
そういう人は大抵『一回以上死に掛けた人』である。

僕のように貧乏ではあるが死に掛けたことはないような人は比較的普通なのだが。

貧乏学園中等部2年の生徒は38人、男女半分ずつだ。

まあそんなこんなで皆さんには僕と一緒に『貧乏学園中等部2学年』を見守って欲しい。

この学校の人たちの奇行を……

2 限目 政治経済

世間では新年への準備が進められている中、我ら貧乏学園ではごく普通に授業がある。

なので12月29日も僕は学校に行かなければならなかった。

今日の授業は『政治経済』と『英語』と『数学』と『生物』だ。

今日はその中の『政治経済』の授業を皆さんに見ていただく。

政治経済の担当教師は『箒魅礼次先生（通称ハズレ先生）』である。

この先生は変人ではないのだけれど、運の悪さで有名である。何故かこの先生は教室に来る度に傷を増やしていく気がする。

一昨日は急な地震で転んで後頭部を教卓の角にぶつけた挙句、チヨークの入った箱が先生の顔に落ちてきて、ものの見事に先生の鼻と耳と口にチヨークが入った。

鼻と口はわかるが耳なんて普通入りっこないのに入ってしまったところハズレ先生クオリティである。

まあそんな感じですこぶる運が悪いハズレ先生の授業をとくところ
覧あれ。

「起立ー」

と委員長の長谷見が言う。

ちなみに長谷見は比較的普通の人だ。

「礼ー」

「着席ー」

「はいじゃあ政治経済の授業始めます。予習してない奴挙手。ひっぱたくから。容赦なくひっぱたくから挙手」

当然誰も手を挙げない。

「よし、大丈夫なんだな。じゃあまず皆予習で分かっていると思うが今日は株についてのことをやります。まず株の説明からやります」さて、こっからがこの学校の先生達の暴走だ。

「どんな事業でもそれを興すには元手となるお金が必要ですね。例えば、花屋を開業しようと思ったら、お店を借りるための権利金、陳列棚や証明や看板を買い入れる資金が必要ですし、売り物の花を最初に仕入れるためのお金を用意しないと開店出来ません。その元手は誰かから資金援助を受けることが多いです。まあ店主が全額用意するケースもありますけど。資金援助する人は……」

さて、この時点で授業は約10分経った。

先生は一切口と手を休めず説明を続けている。右手には4色のチョークを持ち、左手には黒板消しを持っている。

恐らくそろそろハズレ先生に不幸が降り注ぐであろう……

と思った瞬間、先生の真上の電気から蛍光灯が落ちて来て、先生の頭に命中。ちなみに蛍光灯が先生に当たるのはたしか今月で15回目だ。

「まあ要するに株とは投資した人の権利を文書の形ではっきり記録したものだ」

はつきりと無視。

先生の頭が紅に染まる。

生徒は笑いを堪えている。

ここで笑ってしまったら先生の容赦ないビンタが飛んで来るからだ。

先生の不幸はまだ続く。

校庭では体育の授業で野球が行われている。

カキン、と金属バットの爽快なホームランの音が鳴り響く。
すると僕らの教室の窓ガラスが割れた。

そして案の定、先生の鼻っ柱に硬球が命中した。

「すいませーん！」

と校庭から聞こえる。

「気をつけるよー。人に当たったら大変だからー」
と笑いながら硬球を返すハズレ先生。

いや、アンタの鼻っ柱に当たったから。ボールクリーンヒットしたから。ホームランだけどヒットしたから。
ていうかせめて窓ガラス割ったことは注意しようぜ。

「じゃあ猪狩！」

じゃあつてなんだよ。何の順接だよ。

「融資と投資の違いを答えてみる！」

実は予習していない僕は分かる筈もなかった。

「わかりません」

「何だとコラア！」

鬼のような形相で先生が近付いてくる。恐らく容赦ないビンタを食らわせようとしているのだろう。

だがそこはハズレ先生クオリティである。

僕の席にくるまで12回転んだ。

そして何とか僕の席まで来たハズレ先生のビンタは痛くも痒くも歯痒くもなかった。だって先生ボロボロだもん。死にかけてるもん。血だらけだもん。

「あの、アレだ。まあそういうことだ
どういうことだ。」

「日野！株主の権利を一つ答えろ！」
いや、無茶だろ。だってそれ2ヶ月後にやる範囲だぜ……ってなん
で僕は知っているんだ。

「残余財産分配権です」

日野つえええ！

「……お見事」

今日は先生の傷はいつもよりは少なめである。
今日は救急車を呼ぶ必要は無さそうだ。

「起立ー、礼ー」「ありがとうございました」

そして先生は教室を出ようとした。
教室の出口に向かっていている最中、先生は転んで額に画鋲が刺さった。

先生の顔は既に真っ赤である。

3 限目 節分（前書き）

節分してるとき考え付いて、即興で作ったので今まで以上に駄作で
すが…

まあみてやってください。

3 限目 節分

「皆ー、盛り上がってますかー」

いえーい

「テンション上がってますかー」

いえーい

今日は貧乏学園の奇怪イベントの一つ、『豆撒き大戦』があるのだ。

このイベントは2月3日、福を呼び込むことよりも、鬼を祓うことよりも、豆を食うことに意義がある。

1人1人が学校から支給された年齢分の豆を撒き、撒いた後にいくらかでも食べて良いという本来の節分とは若干、いや相当逸脱したイベントである。

「皆ー、豆食べたいですかー」

いえーい

校長の問い掛けに律義に答える生徒達。とにかく早く豆が食べたいのだろう。

「えーごほん。では生徒の皆さんは担任から豆をもらってください」

校長の指示通り我らは担任の波田源内先生（通称ハゲ先生）から豆

を承った。

僕は14歳なので14個豆をもらった。

「えーでは皆さん、用意はいいですかー」

空気が張り詰める。

「ではいきますよー、オニはー外ー」

全員一斉に豆を投げる。

これは後で拾いあうのだから皆自分の目の前に豆を投げる。

鬼を外へ追いやる気はさらさら無いみたいだ。

「福はー内ー」

やはり目の前に投げる。

そしてこの掛け声を9回繰り返したところで高等部も終わった。

そして空気が一層張り詰める。

皆戦闘態勢になる。

「ではいいですかー。では、豆を拾ってたべてくださーい」

うおおおおおおお！

生徒達の怒声が一気に校庭内に広がる。

皆豆を取るために身を削る。

後ろから後頭部を殴打され、昏倒する生徒。

明らかなムエタイ技を放って次々と生徒を倒していく生徒。

仲良しこよしなイベントではない、これは明らかな抗争。

豆を欲す者同士のぶつかり合い。

そこに秩序など存在せず、あるのは狂気のみ。

ちなみに僕は校庭の端っこで巻き込まれないように座っている。

とりあえず豆を15個確保したのもう戦いたくないし。
今は完全にプロレス観戦気分である。

「ていうかさ、豆って年齢分食うんじゃないのかよ……」

迂闊だった。

戦争している生徒達の視線が俺に集まる。

「え、あの、すみません……」

「デメエ……それは言っちゃいけないやつだろーが！」

この後僕が全校生徒にリンチされたのは言うまでもない。

3 限目 節分（後書き）

これは節分にあわせて考え付いたものなので
急いで作りました。

結局日付かわってしまいましたけど。

まあこれからも暖かい目で見守ってやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378b/>

貧乏学園中等部

2010年10月21日21時19分発行